

自己中心性尺度の作成：
「他者への共感不全」と「自己内省の困難さ」に焦点を当てて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣澤, 愛子, 大西, 将史, 岸, 俊行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10320

自己中心性尺度の作成

— 「他者への共感不全」と「自己内省の困難さ」に焦点を当てて—

廣澤 愛子* 大西 将史* 岸 俊行*

(2017年10月2日 受付)

本研究においては、「自己中心性」について、ピアジェの自己中心性を起点として概念整理を行い、共感不全、及び自己省察的態度の欠如という2つの側面を持つ概念として定義した。そして、そのような自己中心性を測定するための尺度を作成し、他尺度との相関からその特性について考察した。具体的には、684名の大学生・大学院生を対象に調査を行い、因子分析の結果、仮定した2因子モデルの妥当性が確認され、「他者への共感不全」と「自己への内省困難」と命名した。また、 α 係数及び再検査信頼性係数も十分な値を示し、信頼性が確認された。他尺度との相関からは、「他者への共感不全」は、情動的にも認知的にも他者の身になることが難しいという点において、「自己内省の困難さ」は、自己完結的で独善的になりやすいという点において、いずれも自己中心的な心性を表しており、「自己中心性」の2つの側面を捉えられていることが確認された。また、「自己中心性」は本人の精神的な不健康さとは結びついておらず、本人よりもむしろ周囲の人が迷惑する可能性が示唆された。今後は、「自己中心性」が対人場面で起こす問題への介入策について検討することが課題である。

キーワード：自己中心性尺度、共感不全、内省困難、信頼性及び妥当性の検討

I.はじめに

ひとは「自己中心性」という言葉に、どのようなイメージを抱くだろうか。「自己中（じこちゅう）」という言葉があるように、どちらかと言えば、「自分勝手」「利己的」というような、ネガティブな印象をもつひとが多いかもしれない。大辞林第三版をはじめ、いくつかの辞書・事典を

* 福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

見ると、自己中心性とは、「自分自身を物事を中心と定義して、世の中の物事を解釈する（本人がそれを自覚していないことが多い）こと。また、そのような考えを元に、他人のことを考慮しない行動をする性質のこと」と定義されており、ややネガティブなニュアンスが含まれているように感じられる。その一方、ピアジェが提唱した自己中心性の説明として、「幼児の思考様式の特徴で、事象を自分の立場あるいは一つの視点からしか分析・認識できないこと」という記載もある。ここには特にネガティブなニュアンスは含まれておらず、認知発達過程の一つの現象と捉えられている。

本研究においては、自己中心性について、まずはピアジェが提唱した人の認知発達過程における思考様式としての「自己中心性」を出発点とし、概念整理を行う。そしてその過程において、認知・思考様式としての自己中心性がもたらす様々な現象—そこには、ネガティブな現象も含まれる—を明らかにし、それらをまとめたものを本研究における「自己中心性」の定義とする（Ⅱ章）。そしてⅢ章・Ⅳ章においては、その定義に基づいた自己中心性尺度を作成し、信頼性・妥当性を検討すると共に、他の尺度との相関を明らかにする。最後に、Ⅴ章において他の尺度との相関に基づいて「自己中心性」の特性について考察し、Ⅵ章において本研究の限界と今後の課題を述べる。

Ⅱ.問題と目的

1. 自己中心性とは

(1) ピアジェの自己中心性

Piaget (1936) は、人の認知発達過程を、「感覚運動期（0歳～2歳頃）」「前操作期（2歳～7歳頃）」「具体的操作期（7歳～11歳頃）」「形式的操作期（11歳～16歳頃）」の4段階に分けて考えている。その中で、自己中心性は前操作期に見られる思考様式であり、自分あるいは一つの視点からしか、物事を認識できない状態を意味する。先にも述べた通り、ピアジェのいう自己中心性には、利己的というようなネガティブな意味合いは含まれておらず、あくまで、視点が自分あるいは一つに固定されており、別の視点から見たり、他者の視点を想定したりすることがない状態を意味する。

その後、具体的操作期に入る頃には「脱中心化」が起り、子どもは多様な視点があることに気が付くようになっていく。例えば対象について、目立つ特徴だけではなく他の特徴も含めて満遍なく全体を見ることができるようになり、より客観的に対象を捉えられるようになる。また、視点を自分以外の場所に移すことができるようになり、他者の視点に立って他者のことを考えることが可能になっていく。逆に、このような脱中心化が成人後にもあまり見られない場合には、自己の言動をさまざまな視点から考えたり、他者の立場からその他者の意図や考えを理解したりすることに困難が生じると推測される。

(2) 他者視点取得

前節で述べた脱中心化に係わる概念として、他者の視点に立って他者を理解することを「他者視点取得 (perspective-taking)」と言う。他者視点取得には、認知的視点取得と感情的視点取得があり、認知的視点取得は他者の立場からその他者の意図や考えを理解することを意味し、感情的視点取得は他者の感情を正しく読み取ることを意味する (田中・清水・金光, 2013)。

認知的視点取得は心の理論と密接に係わっており、直接観察することができない他者や自己の心的状態を推論する能力に関係している。一方、感情的視点取得は表情や身振りから、ある程度観察可能な心的状態を扱っているため、認知的視点取得とは異なる概念であると言える (Cutting & Dunn, 1999)。いずれにせよ、他者の心的状態の理解には、これら二つの視点取得が含まれており、この二つの視点取得が獲得されていない状態、つまり、他者の視点に立って他者の意図、考え、及び感情を正しく読み取る能力が欠如している状態が、本研究における自己中心性の主要な一側面と言える。

(3) 他者の感情への応答性

他者の感情を正しく読み取るためには、前節で述べた「視点取得」は極めて重要な能力であるが、一方で、それだけでは他者の感情を正しく読み取ることは難しいと思われる。なぜなら、他者の感情や情動を「感じる」こともまた、他者の感情を正しく読み取るためには必要だからである。したがって、他者の心理状態に対する素質的な感受性や被影響性が (鈴木・木野, 2008)、他者の感情を正しく読み取るためには求められると言える。つまり、他者の感情や情動に開かれており、またそもそも、他者の情動を感じ取ろうとする姿勢がなければ、他者が発するものを情動的に理解することはできないと言える。したがって、このような他者への応答性や他者を理解しようとする姿勢の欠如も、本研究における自己中心性の主要な一側面と言える。

(4) 省察的態度

具体的操作期に入り、脱中心化が起こると、一つの視点だけではなく、別の視点から対象を理解することが可能になり、客観性が身についていくことについては先に述べた。この客観性には、自分以外の他者の視点から物事を理解することのみならず、自己について、一つの視点からだけでなく他の視点から考えるなど、多角的・客観的に捉えることができるようになることも含まれている。近年、脱中心化はマインドフルネス認知行動療法によって獲得されるこころの状態を表す中核的概念として注目されており (Fresco, D. M., Moore, M. T., Dulmen, M. H. M., Segal, Z. V., Ma, S. H. Teasdale, J. D., et al, 2007)、抑うつと負に相関するなど (越川・島津・近藤, 2010)、成人後においても極めて重要な能力であるとみなされている。

また、このように自分に注意を向けている状態やそうなりやすい状態のことを、自己注目と呼び (森・丹野, 2016)、自己注目は、慢性的かつ否定的に自己に注目する「自己反芻」と、自己に対する知的好奇心によって動機づけられた「自己内省」の二つに大別される (Trapnell & Cambell, 1999)。そして後者の自己内省は、脱中心化と正の相関を持ち、脱中心化を通じて間接的に抑う

つと負に関連すること（Mori & Tanno, 2015），また脱中心化の高さを通じて自己理解の向上に繋がること（Şimşek, Ceylandag, & Akcan, 2013），などが明らかとなっている。したがって，脱中心化や自己理解と関連が見られる「自己内省」の欠如も，本研究の「自己中心性」の主要な一側面と言えるだろう。また，慢性的かつ否定的に自己に注目する「自己反芻」についても，自己反芻的な傾向の高い人は，常に自己不一致に注目しており（Trapnell & Cambell, 1999），そこから葛藤や苦悩が生まれ，自己内省が促され，自己理解が深まることもあると思われる。実際，自己内省の高い個人は自己注目傾向も高いため，頻繁に自己不一致に注目しているのではないかと指摘されており（森・丹野, 2016），自己内省と自己反芻は密接なつながりを持つと推測される。したがって本研究においては，「自己内省」と「自己反芻」の双方を自己省察的態度と捉え，この自己省察的態度の欠如を，本研究における「自己中心性」の主要な一側面であると捉える。

(5) 本研究における「自己中心性」

これまでに述べてきたことをまとめると，本研究における「自己中心性」とは，1) 他者視点取得の欠如，2) 他者の感情への応答性・感受性の欠如，3) 自己省察的態度の欠如，の3点にまとめることができる。1) 及び2) については，いわゆる共感性に係わる概念であり，一言で述べるならば，「共感不全」ということができるだろう。ここでの共感不全とは，鈴木・木野（2008）の「他者志向」的な共感性の欠如と重なり，他者の身に起こった出来事に対して，「他者のこととして」，喜んだり悲しんだりする反応がないことを表している。3) は，自己を多様な視点から客観的に眺める能力や，自己を振り返って葛藤したり悩んだりする能力の欠如を意味する。ここでの多様な視点の中には「他者の視点」も含まれており，他者の視点から自己を眺めることや自己と他者を結び付けて考えることの困難さとも関連していると言える。その意味では，鈴木・木野（2008）の「自己志向」的な共感性の欠如と関連があり，他者の身に起こった出来事に対して，「自分の身に起こったらどうしよう」と不安になったり，「自分も刺激をもらった」と喜んだりするような自己志向的な共感的態度の欠如を意味していると言える。

2. 自己中心性に係わる他尺度との関連

青年期における自己中心性を測定する尺度としては，Enright, Shukla, & Lapsley（1980）による Adolescent Egocentrism-Sociocentrism Scale（以下，AES尺度）があり，Yamamoto, Tomotake, & Ohmori（2008）によって，AES尺度日本語版の因子構造が明らかにされている。AES尺度日本語版における自己中心性は，他者も自分のことを自分自身と同じくらい批判や賞賛をもって見ているという前提に立って反応を常に予期し，それに向けて反応する「想像上の観客」と，他者の考えや思いよりもむしろ自分自身の内面の考え，思いの方に注目する「自分焦点」の2つの下位尺度から構成されている。これらは，本研究における自己中心性の「自己省察的態度の欠如」に重なる概念と言えるが，一方で，本研究の自己中心性は「他者視点取得の欠如」や「他者の感情への応答性・感受性の欠如」をも含むという点で，AES尺度日本語版とは異なる概念から構成されていると言える。

また、自己中心性については、自己愛を測定する尺度の中でも扱われており、例えば原田(2009)は、Kernbergの理論に依拠しながら、他者への無関心や他者への共感性の欠如を意味する「自己関心・共感の欠如」を下位尺度として、自己愛人格尺度を作成している。本研究における自己中心性も、他者への共感不全を含んでおり、重なる概念と言える。しかし、原田(2009)の「自己関心・共感の欠如」の尺度項目を見ると、「欲しいものを手に入れるためには、他人をだますのも仕方ないと思う」「自分のために他人を利用することを、必ずしも悪いとは思わない」「出世するためなら、嘘をつくこともいとわないだろう」「地位の高い人としか付き合う気にならない」など、他者を搾取するニュアンスや上昇志向的な内容が含まれており、その意味では、本研究における他者への共感不全とは異なる概念と言える。

このように、本研究における自己中心性は、他者への共感不全と省察的態度の欠如という二つの側面から成り立っており、また、理論的には自己愛を構成する概念も内包しているが、自己愛に関する既存の尺度に見られるような、他者の搾取や上昇志向は含まれていないと言える。

したがって、本研究における自己中心性は、ニュートラルな事象として、「他者のことが分からない」「自分のことを省察できない」という二つの側面を持つ、オリジナルな尺度と言える。

3. 自己中心性がもたらす問題

これまで述べてきたことから、自己中心性は、共感不全や自己省察的態度の欠如といった特徴に整理することができると考えられた。では、共感や省察がうまく働かないと、どのような問題が引き起こされるのであろうか。

まず、共感性については、古くから、向社会的行動や円滑な社会的相互作用を規定する重要な要因と言われており(Eisenberg & Miller, 1987)、共感的な社会的行動が良好なコミュニケーションを促したり対人葛藤を低減させたりすることが知られている(Davis, 1994)。したがって、共感の低さ(共感不全)は、対人的な問題を引き起こす要因になることが推測され、犯罪やいじめなどの反社会的行動を促すことも明らかにされている(Mitsopoulou & Giovazolias, 2015; van Langen, Wissink, van Vugt, Van der Stouwe, & Stams, 2014)。

一方、自己省察的態度の欠如については、自己を客観的に眺めたり、自己を振り返って葛藤・後悔して修正することの難しさを意味しているため、物事の判断が独善的になる可能性があると言える。つまり、「自分はこれでよい」と思っていることが、他者からすれば迷惑であったり困ったりする可能性があり、対人場面や社会的場面において問題が生じることが予測される。

このように、「共感不全」及び「自己省察的態度のなさ」は、対人的な問題を引き起こす可能性があり、その際、本人よりもむしろ、他者が迷惑を被る可能性があると言える。つまり、このような心性が本人の精神的健康さとはどのような関連が見られるのかを明らかにすることも重要であるが、それ以上に、互いに協力すべき場面やいじめなどの集団における問題が生じているときに、共感不全や非内省的態度に基づいた行動がなされると、周囲がどのような影響を受けるのかを明らかにすることが肝要である。このような「自己中心性」の特性やそれがもたらす影響に

ついて検討することは、良好な対人関係や健全な集団活動の促進に繋がる有益な知見の獲得に結びつく可能性があるが、これまで、このような観点から自己中心性を概念化し、その特性や影響を明らかにした研究は見当たらない。

4. 本研究の目的

前節で述べたことを踏まえて、本研究では「共感不全」と「自己省察的態度の欠如」からなる自己中心性尺度を作成する。そして信頼性及び妥当性を検討するとともに、他尺度との相関から「自己中心性」の特性を明らかにする。なお、ここで論じようとしている自己中心性は、集団生活や対人場面において、本人よりも他者が迷惑を被る可能性のある心性と言える。したがって、自己中心性尺度の質問項目を、「いじめなどの集団における対人葛藤場面に際して、人がどのような態度を取るのか」を質的データから明らかにした研究（廣澤，2008）を参考にして、作成することとする。また、このような自己中心性が、本人の精神的健康さとはどのような関連が見られるのかについても、他尺度との相関から検討する。

Ⅲ. 方法

1. 調査協力者

大学生及び大学院生684名（男性323名，女性361名）を対象に調査を実施した。年齢は18歳～29歳であり、平均年齢は、男性19.7歳，女性19.6歳であった。

2. 調査時期

2015年5月から2016年1月に、4回に分けて実施した。また、調査協力者の負担を軽減するために、以下の測定尺度すべてを全調査協力者に実施するのではなく、いくつかの測定尺度を選択して4つの異なる質問紙を準備し、調査対象者を変えて実施した。

3. 調査内容

実施した測定尺度と、各測定尺度の実施人数、性別、及び年齢は以下の通りである。

(1) 自己中心性尺度

455名（男性235名，女性220名，18歳～29歳，平均年齢19.70歳）を対象に実施した。「共感不全」7項目、及び「自己省察的態度の欠如」6項目の2因子を想定して作成した計13項目からなる尺度である。「まったく当てはまらない」「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「少し当てはまる」「当てはまる」「非常に当てはまる」の6段階で評定した。

これらの質問項目は、大学生127名を対象に行ったいじめ体験に関する研究（廣澤，2008）で得られた記述データをもとに作成した。具体的には、「被害者」「加害者」「傍観者」「観衆」の4つの立場におけるいじめ体験に関する記述の中で、先に明らかにした「自己中心性」の2つの側面、すなわち、「共感不全」と「自己省察的態度の欠如」に該当すると判断された記述をすべて抜き出し、これらの記述に、意味のまとまりごとにコードを付した。そしてそれらのコードを、その類似性と差異性に注目しながら分類・集約し、カテゴリーを生成した。最終的に「共感不全」

に該当した4つのカテゴリー〈感情移入の欠如〉・〈冷淡さ(思いやりのなさ)〉・〈他人事〉・〈他者の気持ちが分からない〉を用いて7つの質問項目を作成し、「自己省察的態度の欠如」に該当した5つのカテゴリー〈葛藤〉・〈自己嫌悪〉・〈悶々と悩む〉・〈自問自答〉・〈振り返って悩む〉を用いて6つの質問項目を作成した。その結果、「共感不全」7項目、「自己省察的態度の欠如」6項目、計13の質問項目からなる「自己中心性」尺度が作成された。

(2) 多次元共感性尺度 (鈴木・木野,2008)

111名(男性48名,女性63名,18歳~23歳,平均年齢19.20歳)を対象に実施した。「被影響性」5項目、「他者志向性」5項目、「想像性」5項目、「視点取得」5項目、「自己志向的反応」4項目の計24項目からなる尺度である。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」「やや当てはまる」「とてもよく当てはまる」の5段階で評定した。「悲しんでいる人を見るとなぐさめてあげたくなる」など、他者に焦点づけられた情緒的反応を意味する「他者志向性」や、相手の立場からその他者を理解しようとする「視点取得」は、本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「共感不全」と負に相関すると予想した。また、自己を架空の人物に投影させる「想像性」と、「他人の失敗する姿をみると、そうなりたくないと思う」など、他者の心的状態について自己に焦点づけられた情緒的反応を示す「自己志向的反応」は、本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「自己省察的態度の欠如」と負に相関すると予想した。

(3) Alexithymia Questionnaire (GALEX; 後藤ら, 1999)

106名(男性49名,女性57名,18歳~27歳,平均年齢19.55歳)を対象に実施した。「感情認識言語化困難」8項目、「空想・内省困難」8項目の計16項目からなる尺度である。「全く当てはまらない」「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらとも言えない」「少し当てはまる」「当てはまる」「全く当てはまる」の7段階で評定した。自分の感情を認識したり表現したりすることの困難さを表す「感情認識言語化困難」は、本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「自己省察的態度の欠如」と正の相関があると予測した。また、空想力・想像力が貧困であり、表層的で操作的な思考スタイルを意味する「空想・内省困難」は、本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「共感不全」及び「自己省察的態度の欠如」の双方と正の相関があると予測した。

(4) Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ; 高野・丹野, 2008)

123名(男性39名,女性84名,18歳~23歳,平均年齢18.78歳)を対象に実施した。「反芻」12項目、「省察」12項目の計24項目からなる尺度である。「まったく当てはまらない」「当てはまらない」「どちらでもない」「当てはまる」「とても当てはまる」の5段階で評定した。本尺度は、自己へ注目を向けている状態や、そのような状態になりやすい性格特性を測定するものであり、本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「自己省察的態度の欠如」と負の相関が見られると予測した。

(5) 日本版 GHQ 精神健康調査票 28 項目版 (中川・大坊, 1996)

106名(男性49名,女性57名,18歳~27歳,平均年齢19.55歳)を対象に実施した。「身体症

状」7項目，「不安・不眠」7項目，「社会的活動障害」7項目，「うつ傾向」7項目の計28項目からなる尺度である。項目により文言は異なるが，主として，「まったくなかった」「あまりなかった」「あった」「たびたびあった」の4段階で評定した。本調査は，神経症のみならず，不安や緊張，さらにうつ傾向などを明らかにすることが可能であり，本調査結果は精神的な不健康さの指標になると言える。したがって，本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「共感不全」及び「自己省察的態度の欠如」の双方と，正の相関が見られると予測した。

(6) 本来感尺度（伊藤・児玉，2005）

455名（男性235名，女性220名，18歳～29歳，平均年齢19.70歳）を対象に実施した。自分自身に感じる本当らしさの感覚を測定する尺度であり，全7項目で構成されている。「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」「まあまあ当てはまる」「当てはまる」の5段階で評定した。本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「自己省察的態度の欠如」は，自分自身を見つめ直すなど，自分らしさを認識する機会の乏しい状態を指すため，本来感尺度との間に負の相関が見られると予測した。

(7) 自尊感情尺度（Rosenberg, 1965）

455名（男性235名，女性220名，18歳～29歳，平均年齢19.70歳）を対象に実施した。10項目からなり，自分自身について「これでよい」と思える自尊感情を測定する尺度である。本研究では，山本ら（1982）による邦訳版を，第8項目を除いて使用した。また，「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらとも言えない」「やや当てはまらない」「当てはまらない」の5段階で評定した。自分自身について「これでよい」という感情を持つことができるとは，精神的に健康な状態を意味していると推測されたため，本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「自己省察的態度の欠如」と負の相関が見られると予測した。

(8) いじめ停止行動（中村・越川，2014）

455名（男性235名，女性220名，18歳～29歳，平均年齢19.70歳）を対象に実施した。いじめを止めたり，仲裁したりする際に必要な行動をどのくらいとることができると思うかを尋ねる「いじめ介入行動」6項目と，いじめを傍観したり，はやし立てたりする行動をどれくらい取らないでいられると思うかを尋ねる「いじめ助長行動の抑止」8項目の計14項目からなる。「いじめ介入行動」については，「取ることができない」「少し取ることができる」「どちらとも言えない」「取ることができる」「いつも取ることができる」の5段階で，「いじめ助長行動抑止」については，「取ってしまう」「少し取ってしまう」「どちらとも言えない」「取らないでいられる」「いつも取らないでいられる」の5段階で評定した。双方とも，得点が高いほどいじめ停止行動を取ることができる本人が考えていることを意味し，本研究で作成する自己中心性尺度の下位尺度「共感不全」と負の相関が見られると予測した。

(9) 再検査信頼性の検討

本研究で作成した「自己中心性尺度」について，上記の調査協力者561名とは別に，119名（男

性32名，女性87名，18歳～27歳，平均年齢19.7歳）に対して，1か月間隔で2度実施した。調査時期は，2016年1月～2月である。

IV. 結果

1. 自己中心性尺度の因子構造の検討

455名に対するデータを分析対象とし，「自己中心性尺度」の13項目について，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った（Table1）。その結果，固有値の減衰状況と因子負荷量の解釈可能性から2因子解を採用した。これは，当初想定していた下位概念を測定するための項目群と完全に一致したので，第一因子を他者の心的状態に対する反応不全を表すものとし，「他者への共感不全」と命名し，第二因子を自己の言動に対する反応不全を表すものとし，「自己内省の困難さ」と命名した。ただし，「自己内省の困難さ」に含まれる尺度項目を見ると，「葛藤に苦しむこ

Table 1 自己中心性尺度の因子パターンならびに因子間相関

	F1	F2	M	SD
他者への共感不全（7項目）$\alpha = .83$				
*他者の気持ちに深く共感する方だ。	-.755	-.001	3.94	1.15
他人の喜んでいる姿や悲しんでいる姿に共感できない。	.729	-.011	2.41	1.15
*他人の喜びや悲しみに深く感情移入する方だ。	-.728	-.053	3.85	1.19
*人が喜んだり悲しんだりしているのを見ると、自分もうれしくなったり悲しくなったりする。	-.659	.004	4.18	1.22
心から人を思いやることがない。	.576	.014	2.14	1.08
人に深く共感したことはない。	.572	-.003	2.32	1.13
他者が困っていても所詮は他人事（ひとごと）と 思ってしまう。	.424	-.035	3.05	1.17
自己内省の困難さ（6項目）$\alpha = .82$				
葛藤に苦しむということがない。	-.023	.793	2.39	1.22
率直に言って、自己嫌悪に苦しむことはない。	-.013	.749	2.42	1.34
強い葛藤を抱くということがない。	.001	.721	2.53	1.19
*悶々と悩むことがある。	.083	-.685	4.22	1.35
*自問自答することがある。	-.047	-.507	4.08	1.37
*自分の言動を振り返って、「本当にあれで良かったのか」と悩むことがある。	-.102	-.491	4.69	1.17
因子間相関				
	F1	F2		
F1	1.000	.209		
F2	.209	1.000		

*は、逆転項目である。

とはない」「率直に言って、自己嫌悪に苦しむことはない」など、自分自身のネガティブな言動に向き合うことを回避する内容となっている。したがってここでいう「内省」とは、内容的にはRRQ日本語版の自己に対する知的好奇心によって動機づけられた「自己内省」よりも、RRQ日本語版の慢性的かつ否定的に自己に注目する「自己反芻」に近く、自身のネガティブな言動を振り返り、自分の至らなさや間違いに気づいて後悔したり反省したりすることを意味している。本下位尺度が、このように「自己のネガティブな言動に向き合うことが出来ない」という意味を持つ項目から構成された理由は、いじめ体験時の態度から質問項目を作成したからである。したがって、「他者への共感不全」も含めて、本研究における自己中心性尺度は、いじめのような対人葛藤場面における自己中心的態度を測定する尺度である、と言える。なお、回転前の累積寄与率は51.52%であった。

次に、因子間相関及び下位尺度間相関については、因子間では $r = .209$ 、下位尺度間では $r = .172$ の1%水準で有意な正の相関が見られた。

以上の結果から、他者への共感不全（7項目）と自己内省の困難さ（6項目）をもって、「自己中心性尺度」とする。

2. 「自己中心性尺度」の信頼性の検討

(1) 内的整合性の検討

尺度の内的整合性を意味する α 係数は、「他者への共感不全」で.826、「自己内省の困難さ」で.821と高い値を示した。このことから、本尺度は、内的整合性という点において十分な信頼性を備えていると判断された。

(2) 再検査法による信頼性の検討

「自己中心性尺度」の下位尺度である、「他者への共感不全」及び「自己内省の困難さ」について、第1回目調査と第2回目調査の尺度得点の相関係数を算出し、それを再検査信頼性係数とした。

その結果、「他者への共感不全」では.866、「自己内省の困難さ」では.857という、高い値が得られた。このことから、本尺度は、経時的安定性という点において十分な信頼性を備えていると判断された。

3. 「自己中心性尺度」の構成概念妥当性の検討

自己中心性尺度の構成概念妥当性を検討するために、「自己中心性尺度」及び、その下位尺度「他者への共感不全」・「自己内省の困難さ」と、他の尺度の下位尺度との相関関係を明らかにした（Table2）。

(1) 多次元共感性尺度（Multidimensional Empathy Scale：MES）との相関

「自己中心性尺度」の下位尺度「他者への共感不全」と、MES「他者志向性（ $r = -.754$ ）」及びMES「視点取得（ $r = -.271$ ）」の間に有意な負の相関が認められた。

また、「自己中心性尺度」の下位尺度「自己内省の困難さ」と、MES「想像性（ $r = -.478$ ）」、

Table 2 自己中心性尺度と他尺度との相関

	自己中心性尺度	他者への共感不全	自己内省の困難さ
多次元共感性尺度 (n = 111)	-.588**	-.418**	-.458**
被影響性	-.288**	-.161	-.267**
他者指向性	-.605**	-.754**	-.154
想像性	-.391**	-.101	-.478**
視点取得	-.224*	-.271**	-.065
自己指向性	-.147	.189*	-.402**
GALEX (n = 106)	.203*	.214*	.139
感情認識言語化困難	-.243*	-.068	-.399**
空想・内省困難	.489**	.322**	.575**
Rumination-Reflection Questionnaire (n = 123)	-.441**	-.084	-.612**
反芻	-.537**	-.199*	-.643**
内省	-.212*	.072	-.413**
日本版GHQ28全体 (n = 106)	-.236*	-.067	-.386**
GHQ28身体症状	-.242*	-.192*	-.244*
GHQ28不安と不眠	-.354**	-.197*	-.461**
GHQ28社会的活動障害	-.058	-.021	-.089
GHQ28うつ傾向	-.009	.205*	-.270**
本来感尺度 (n = 455)	.110*	-.126**	.299**
自尊感情尺度 (n = 455)	.148**	-.163**	.394**
いじめ介入行動 (n = 455)	-.206**	-.203**	-.111*
いじめ助長行動抑止 (n = 455)	-.185**	-.218**	-.063

* $p < .05$ ** $p < .01$

MES「自己志向性 ($r = -.402$)」、及び MES「被影響性 ($r = -.267$)」の間に有意な負の相関が認められた。「被影響性」は本尺度とは関連しないと予想したが、弱い相関が見られる結果となった。

(2) Alexithymia Questionnaire (Gotow Alexithymia Questionnaire : GALEX) との相関

「自己中心性尺度」の下位尺度「他者への共感不全」と、GALEX「空想・内省困難 ($r = .322$)」の間に有意な正の相関が認められた。

また、「自己中心性尺度」の下位尺度「自己内省の困難さ」と GALEX「感情認識言語化困難 ($r = -.399$)」との間に有意な負の相関が、GALEX「空想・内省困難 ($r = .575$)」との間に有意な正の相関が認められた。本尺度の「自己内省の困難さ」は、自分の感情を認識したり表現したりすることの困難さを表す GALEX「感情認識言語化困難」とは正の相関があると予測したにもかかわらず、負の相関が見られる結果となった。

(3) Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版との相関

「自己中心性尺度」の下位尺度「自己内省の困難さ」と、RRQ 日本語版の下位尺度「反芻 ($r = -.643$)」及び「省察 ($r = -.413$)」の間に負の相関が認められた。

(4) 日本版 GHQ 精神健康調査票 28 項目版との相関

「自己中心性尺度」の下位尺度「他者への共感不全」と、日本版 GHQ28「身体症状 ($r = -.192$)」及び GHQ28「不安・不眠 ($r = -.197$)」の間に極めて弱い負の相関が認められた。一方、日本版 GHQ28「うつ傾向 ($r = .205$)」との間には正の相関が認められた。本尺度の「他者への共感不全」は、精神的な不健康さと関連があると予測したため、極めて弱いながらも日本版 GHQ28 の下位尺度と負の相関が認められたことは、予想とは異なる結果であった。

「自己中心性尺度」の下位尺度「自己内省の困難さ」と、日本版 GHQ28「身体症状 ($r = -.244$)」、日本版 GHQ28「不安・不眠 ($r = -.461$)」、及び日本版 GHQ28「うつ傾向 ($r = -.270$)」との間に、負の相関が見られた。これについても、本尺度の「自己内省の困難さ」は、精神的な不健康さと関連があると予測したため、日本版 GHQ28 の下位尺度と負の相関が認められたことは、予想とは異なる結果であった。

(5) 本来感尺度及び自尊感情尺度との相関

「自己中心性尺度」の下位尺度「他者への共感不全」と、「本来感尺度 ($r = -.126$)」及び「自尊感情尺度 ($r = -.163$)」との間に、極めて弱い負の相関が認められた。無相関を予想していたため、予想とは異なる結果であった。

「自己中心性尺度」の下位尺度「自己内省の困難さ」と、「本来感尺度 ($r = .299$)」及び「自尊感情尺度 ($r = .394$)」との間に、正の相関が認められた。本尺度の「自己内省の困難さ」は、自分自身を見つめ直すなど、自分らしさを認識する機会の乏しい状態を指すため、これらの尺度と正の相関が見られると予想していた。したがって、こちらも予想とは異なる結果であった。

(6) いじめ停止行動との相関

「自己中心性尺度」の下位尺度「他者への共感不全」と、「いじめ介入行動 ($r = -.203$)」及び「いじめ助長行動抑止 ($r = -.218$)」との間に、負の相関が認められた。

V. 考察

1. 他者への共感不全

「他者への共感不全」と他尺度の下位尺度との相関に基づいて、以下に考察を行う。

(1) MES との相関

MES「他者志向性 ($r = -.754$)」、及び MES「視点取得 ($r = -.271$)」との間に、有意な負の相関が認められたことから、「他者への共感不全」は、他者に焦点づけられた情緒的反応傾向や、相手の立場からその他者を理解しようとする傾向の低さと関連していることが明らかとなった。つまり、「他者への共感不全」とは、他者の身になることで気持ちが揺さぶられたり、他者の視点か

ら物事を理解したりする傾向が弱いという特徴を有していると言える。

(2) 「GALEX」との相関

GALEX「空想・内省困難 ($r = .322$)」との間に有意な正の相関が認められたことから、「他者への共感不全」は、表層的で操作的な思考スタイルと関連があることが明らかとなった。つまり、「他者への共感不全」は、ものごとのプロセスや意味を深く探求しなかったり、想像的に考えなかったりする傾向と関連があると言え、他者について深く考えたり、想像を巡らせたりすることが少ないことが示唆される。

(3) 「日本版GHQ28」、「本来感尺度」、及び「自尊感情尺度（邦訳版）」との相関

GHQ28「うつ傾向 ($r = .205$)」との間に正の相関が認められ、GHQ28「身体症状 ($r = -.192$)」、及びGHQ28「不安・不眠 ($r = -.197$)」との間に極めて弱い負の相関が認められた。また、「本来感尺度 ($r = -.126$)」、及び「自尊感情尺度 ($r = -.163$)」との間に、極めて弱い負の相関が認められた。このことから、「他者への共感不全」は、抑うつ的な症状と関連が見られることが明らかとなったが、それ以外は、極めて弱い関連が見られたにすぎない。したがって、「他者への共感不全」は、抑うつ的な症状を除いて、本人の精神的な不健康さとはあまり関連がないと考えられる。

(4) いじめ停止行動との相関

「いじめ介入行動 ($r = -.203$)」、及び「いじめ助長行動抑止 ($r = -.218$)」との間に、負の相関が認められたことから、「他者への共感不全」は、いじめを止めたり、仲裁したりする際に必要な行動を取る傾向の弱さや、いじめを助長するような行動を取らないでいられる傾向の弱さと関連が見られることが明らかとなった。つまり、「他者への共感不全」は、いじめの防止やいじめ激化の抑止には、マイナスに働くことが示唆される。

(5) 「他者への共感不全」の特徴

これらの結果をまとめると、「他者への共感不全」は、他者の気持ちになったり、他者の置かれている状況を踏まえてその他者を理解しようとしたりする傾向が弱く、また、そもそも他者のことを深く考えたり想像を巡らせたりすること自体が少ないという特徴を有していることが明らかとなった。さらに、他者がいじめに遭っている際に、そのいじめを止めようと介入したり、いじめを助長するような言動を取らないようにすることも難しいという特徴が見られた。つまり、「他者への共感不全」は、他者の視点に立って考えたり、他者の気持ちを汲むという愛他的心性の乏しさに特徴づけられると言えるだろう。その一方で、本人の精神的な不健康さとはあまり関連が見られず、本人が苦痛を感じているわけではないと言える。

これら二つの側面から、「他者への共感不全」は、本人には苦痛や葛藤はないが、他者に焦点づけられた言動が乏しく、自己中心的な言動をもたらしている可能性が示唆された。

2. 自己内省の困難さ

「自己内省の困難さ」と他尺度の下位尺度との相関に基づいて、以下に考察を行う。

(1) MESとの相関

MES「想像性 ($r = -.478$)」, MES「自己志向性 ($r = -.402$)」, 及びMES「被影響性 ($r = -.267$)」との間に有意な負の相関が認められたことから、「自己内省の困難さ」は、外界の出来事や他者の体験などを自分に置き換えて考えたり、自分に引き付けて考えたりする傾向の弱さ、また、周囲の人の意見や感情に感化される傾向の弱さと関連があることが明らかとなった。このことから、「自己内省の困難さ」とは、自己と他者、あるいは自己と外界の間に一定の距離があり、他者との係わりをはじめとしたさまざまな出来事を感情や感覚を抱きながら体験すること自体が乏しく、そういった体験に揺さぶられて葛藤したり自己を振り返ったりする機会も少ない状態を表していると推測される。

(2) 「GALEX」との相関

GALEX「感情認識言語化困難 ($r = -.399$)」との間に有意な負の相関が、GALEX「空想・内省困難 ($r = .575$)」との間に有意な正の相関が認められたことから、「自己内省の困難さ」は、自分の感情を認識したり表現したりすることに困難さを感じる傾向の低さと関連があり、さらに、空想力・想像力の貧困さや、表層的で操作的な思考スタイルと関連があることが明らかとなった。これらのことから、「自己内省の困難さ」は、自分では自身の感情認識や感情表現に問題は感じていないものの、実際には、想像力が乏しかったり、じっくりと物事を考えたり自分の気持ちを見つめたりすることは少ない状態を表していると言える。後藤・加藤（2014）も、空想・内省困難が強く、感情認識言語化困難が弱い領域では、特異的に省察が低くなる傾向を指摘しており、これについて、「主観的には精神的に健康なのかもしれないが、自己注目の不活発さが心理的葛藤への直面化を阻害している可能性」があると述べている。

(3) 「RRQ（日本版）」との相関

RRQ日本語版「反芻 ($r = -.643$)」及び「省察 ($r = -.413$)」との間に負の相関が認められたことから、「自己内省の困難さ」は、ネガティブで慢性的な自己注目である反芻と、自己への知的好奇心に動機づけられた自己注目である内省の双方と関連があると言え、自己注目全般が不活性であることが示唆される。また先にも述べた通り、本研究における「自己内省の困難さ」は、「自己に対する知的好奇心によって動機づけられた」自己内省よりも、慢性的かつ否定的に自己に注目する「自己反芻」と近い内容であり、それが、「省察」よりも「反芻」との間に大きな負の相関が見られたことから裏付けられたと言える。但し、「反芻」と「省察」はそもそも密接に係わる概念であり（森・丹野,2016）、「省察」とも中程度の負の相関が見られるため、結論的には、「自己内省の困難さ」は、自己に注意を向ける傾向の弱さと関連していると言える。

(4) 「日本版GHQ28」、「本来感尺度」、及び「自尊感情尺度（邦訳版）」との相関

GHQ28「身体症状 ($r = -.244$)」, GHQ28「不安・不眠 ($r = -.461$)」, 及びGHQ28「うつ傾向 ($r = -.270$)」との間に負の相関が見られたことから、「自己内省の困難さ」は、神経症的傾向や抑うつ傾向の低さと関連があることが明らかとなった。つまり、「自己内省の困難さ」は、自身に

葛藤や悩みが少ない状態であるため、「精神的不健康さ」は低く、まさに、後藤・加藤（2014）が指摘したように、「主観的には精神的に健康」な状態にある可能性が示唆される。

さらに、これを裏付ける結果として、「本来感尺度 ($r = .299$)」及び「自尊感情尺度 ($r = .394$)」との間に、正の相関が認められた。つまり、「自己内省の困難さ」が、自分らしさを持つことができていると感じる傾向や、自分に対する肯定的な感情と関連が見られ、少なくとも本人の自覚の範囲内においては、「自分はこれでよい」という葛藤の少ない状態、精神的に健康な状態であると推測される。

(5) 「自己内省の困難さ」の特徴

これらの結果をまとめると、「自己内省の困難さ」は、本人としては葛藤が少なく、精神的にも健康な状態にあるが、想像力を駆使したりじっくり考えたりする傾向が弱いこと、自己完結的で独善的な考え方になりがちであるという特徴を有していると言える。このような内省力の低さは、後藤・加藤（2014）が指摘するように、「証拠のない自信」や「非現実的楽観性」、さらに「幼児的万能感」に結びつく可能性がある。また、「もし自分だったら？」と自分に置き換えて想像することが少なく、他者や外界の出来事を自分に引き付けて考える傾向が弱いこと、他者や外界との相互作用自体が起こりにくく、自分の考えや気持ちに変化しづらい。したがって、自己完結的で独善的な考え方が維持されやすいという特徴を持つと推測される。

3. 自己中心性の二つの側面

「他者への共感不全」は情動的にも認知的にも、他者の身になることが難しいという点において、「自己内省の困難さ」は自己完結的で独善的になりやすいという点において、いずれも自己中心的な心性を表していると言える。また、前者が、多次元共感性尺度（鈴木・木野，2008）の他者志向性を有する下位尺度「他者志向的反応」及び「視点取得」と相関が見られ、後者が、自己志向性を有する下位尺度「自己志向的反応」及び「想像性」と相関が見られたことから、本尺度が、他者との関係における未熟さと、自己との関係における未熟さという、自己中心性の二つの側面を捉えていることが確認できた。

VI. 終わりに

1. 本研究のまとめ

本研究では、「自己中心性」を、ピアジェの自己中心性を起点として整理し、「他者への共感不全」と「自己内省の困難さ」という2つの側面を持つ概念として定義した。そして、そのような自己中心性を測定する尺度を作成し、他尺度との相関からその特性について考察した。本研究の結果から、自己中心性が、他者との関係における未熟さと、自己との関係における未熟さという2つのベクトルから成り立っていること、また、当人の精神的な不健康さとは繋がっておらず、特に、自己内省の困難さは、自身には葛藤や苦悩があまりないため、精神的にはむしろ健康な状態であることが示唆された。いじめなどの対人葛藤場面において、自己の言動を振り返って反省・

修正することがなければ，本人は葛藤を免れ，少なくとも一時的には精神的健康さが保たれると推測されるが，逆にそれによって，周囲の者は迷惑を被る可能性があることが示唆された。

2. 本研究の限界

(1) 本尺度の一般化可能性

本研究における「自己中心性」尺度は，いじめ体験時における感情や態度から質問項目を作成しているため，ニュートラルな場面ではなく，いじめという葛藤を引き起こすような対人場面における「他者への共感不全」及び「自己内省の困難さ」を反映した項目群と言える。いじめなどの葛藤場面でどのような思考や態度を持つことができるかは，健全な人間関係を築き，円滑な集団生活を送るためには極めて重要である。しかし逆に言うと，本研究で測定している「自己中心性」は，いじめなどの葛藤を引き起こす対人場面における自己中心性であり，それ以外の場面も含めて，常に自己中心性が高い人にも敷衍できるかどうかについては，今後検証する必要があると言える。

(2) 「自己内省」の測定方法

下位尺度「自己内省の困難さ」の尺度項目について，第6項目「自分の言動を振り返って，本当にあれで良かったのかと悩むことがある」は，それに答えること自体が内省であるという矛盾を含んでいる。したがって，この項目を，自己内省を測定するための尺度に入れてもよいかどうかについては再考の余地があると言える。そもそも，内省について自己報告式の尺度で測定すること自体に限界があると言え，この点も含めて，自己内省の測定方法について改善案を練る必要がある。また先にも述べた通り，本尺度における「自己への内省」は，RRQ日本語版の自己に対する知的好奇心によって動機づけられた「自己内省」とは意味が異なり，混乱する可能性がある。したがって，尺度のネーミングについても再度検討する必要があるだろう。

3. 今後の課題

これらを踏まえて，今後の課題としては，1) 本尺度が，どのような場面でも自己中心性が高い人にも当てはまるかどうかを検証すること，2) 下位尺度「自己への内省困難」の尺度項目の修正を検討すると共に，自己内省の程度を測定する方法についても再考すること，さらに，3) 対人場面や集団生活において，自己中心性の高い人でも，いじめをはじめとした集団場面における問題に際して，その問題を抑止するための行動を取ることができるよう，どのような予防的支援が有効であるのかを具体的に明らかにすること，の3点を考えている。

文献

- Cutting, A.L. and Dunn, J. (1999). Theory of mind, emotion understanding, language, and family background: Individual differences and interrelations. *Child Development*, **70**, 853 - 865.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Harper Collins: Westview Press. (菊池章夫 (訳) 1999. 共感の社会心理学—人間関係の基礎—川島書店).
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological*

Bulletin, **101**, 91-119.

- Enright, R.D., Shukla, D.G., Lapsley, D.K. (1980). Adolescent Egocentrism-Sociocentrism and Self-Consciousness. *Journal of Youth Adolescence*, **9**, 101-106.
- Fresco, D. M., Moore, M. T., Dulmen, M. H. M., Segal, Z. V., Ma, S. H. Teasdale, J. D., et al. (2007). Initial psychometric properties of the Experiences Questionnaire: Validation of a self-report measure of decentering. *Behavior Therapy*, **38**, 234-246.
- 後藤和史・加藤夕貴. (2014). アレキシサイミア傾向と指摘自己緒意識の2側面との関連. 日本カウンセリング学会大47回大会, 口頭発表資料.
- 原田新 (2009). 新たな自己愛人格尺度の作成. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, vol.2 (2), 25-32.
- 廣澤愛子. (2008). 現代青年に見られる“いじめ体験における実感のなさ”について—“解離”という特性に注目して—. 現代の社会病理, vol.23, 141-156.
- Hoffman, M.L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. Cambridge University Press. (菊池 章夫・二宮 克美 (訳) 2001, 共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわり— 川島書店).
- 越川房子・島津直実・近藤育代. (2010). マインドフルネス・プログラムの抑うつ低減効果：マインドフルネスの主要素を指標として. 日本教育心理学会総会発表論文集, **52**, 357.
- Mitsopoulou, E., & Giovazolias, T. (2015). Personality traits, empathy and bullying behavior: A meta-analytic approach. *Aggression and Violent Behavior*, **21**, 61- 72.
- 森正樹・丹野義彦 (2016). 自己反芻から脱中心窩への影響に対する自己内省の緩衝作用. パーソナリティ研究, **25** (2), 158-161.
- Mori, M., & Tanno, Y. (2015). Mediating Role of Decentering in the Associations between Self-Reflection, Self-Rumination, and Depressive Symptoms. *Psychology*, **6**, 613-621
- Piajet, J. (1936). *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. Neuchâtel: Delachaux et Niestlé. (谷村寛 & 浜田寿美男 (訳) 1978, 知能の誕生 ミネルヴァ書房).
- Şimşek, Ö. F., Ceylandag, A. E., & Akcan, G. (2013). The Need for Absolute Truth and Self-Rumination as Basic Suppressors in the Relationship Between Private Self-Consciousness and Mental Health. *The Journal of General Psychology*, **140**, 294-310.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己志向・他者志向の弁別に焦点を当てて—, 教育心理学研究, vol.56 (4), 487-497.
- 田中里奈・清水光弘・金光義弘 (2013). 幼児期における他者視点取得能力の発達と社会性との関連. 川崎医療福祉学会誌, vol.23 (1), 59-67.
- Trapnell, P. D., & Campbell, J. D. (1999). Private Self-Consciousness and the Five-Factor Model of Personality: Distinguishing Rumination from Reflection. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 284-304.
- van Langen, M. A., Wissink, I. B., van Vugt, E. S., Van der Stouwe, T., & Stams, G. J. J. M. (2014). The relation between empathy and offending: A meta-analysis. *Aggression and Violent Behavior*, **19**, 179-189.
- Yamamoto, M., Tomotake, M., Ohmori, T. (2008). Construction and reliability of the Japanese version of the Adolescent Egocentrism-Sociocentrism (AES) scale and its preliminary application in the Japanese university students. *The Journal of Medical Investigation*, **55** (3,4), 254-259.